

〔目的〕 日本における在宅老人介護の現状は、デイケア等の社会福祉サービスの整備が急がれているにもかかわらず、依然として家族のうちの介護者1人に過重な負担がかかっているといえる。本研究では介護者の負担を、当人の身体的疲労および精神的疲労の訴えからとらえ、介護者の疲労度に関連する諸要因について明らかにする。

〔調査の対象および方法〕 1989年7月時点で東京都の6カ所のデイケアセンターを利用して老人の、家庭における主な介護者476名に対し、配票調査を実施した。実施期間は1989年8～9月であり、391票が分析対象となった。また、90年7～11月に配票調査の対象者のうち26名に対し訪問面接調査を実施した。

〔結果〕 ①介護者の基本属性――性別は女性81.8%、男性15.3%であった。年齢は22～84歳で、平均が女性54.9歳、男性63.3歳であった。老人との続柄は、妻が夫を介護している場合(以下妻→夫のように示す)が38.1%、娘→母23.8%、嫁→姑22.5%、嫁→舅7.5%、娘→父5.6%であった。男性では、夫→妻58.3%、息子→母33.3%、息子→父5.0%であった。②老人の基本属性――性別は男性45.5%、女性54.5%であった。年齢は48～96歳で、平均が男性73.7歳、女性77.9歳であった。老人の49.6%が脳血管障害、次いで高血圧25.1%、老人性痴呆19.7%、腰痛17.4%などの疾患・症候をもっていた。③介護者の疲労――疲労度の関連要因としては、老人の心身の状態の悪さや、介護者自身の高齢による体力の限界、介護のための途中同居による負担の増加等があげられる。精神的疲労のうち「いらいらする」の訴えは、続柄、老人の性格と関連があった。